

王国復活への U-12 新風

これまでプロ選手を9人輩出しているのは、静岡市内でも屈指の実績。そんな名門少年団でも、今は少子化の影響やクラブチームへの移行で団員数が徐々に減少しつつある。だが、それでもチームに関わる指導者や父兄たちの熱意に衰えは一切ない。子どもたちの夢を育み、夢をつないでいくために、憧れのOB選手たちにも支えられながら、活発に活動が続いている。

麻機サッカースポーツ少年団【静岡市葵区】

夢をつないでいくために

ヘタでもいいから一所懸命に果敢にチャレンジを

現役選手では、杉山力裕(清水)、狩野健太(川崎F)、眞田淳(熊本)、初期の頃では元日本代表GK・森下申一をはじめとする9人ものプロ選手を輩出してきた麻機サッカースポーツ少年団。県内の小学生たちにとって総決算となる「NTTカップ」では、18年連続で県大会進出したこともある創立45年の名門チームだ。

拠点となる静岡市立麻機小学校も、以前は児童が1200人以上いた時代もあり、1学年だけで軽く2チームができるほど団員がいた。だが、今は全校児童が500人台で、団員も4~6年生を合わせて15人(幼稚園の年長児を含む全団で22人)。少子化の影響だけでなく、周辺に力のあるクラブチームが増えて子どもたちが分散しているという時代の流れもある。

ただ、そんな中でも近年はNTTカップの県大会まであと一步のところまで勝ち進んでおり、チームワークや最後まであきらめ

ずに走りきる姿勢で健闘を続けている。麻機を指導し始めて18年の加藤常治監督は、団の方針についてこう語る。

「子どもたちが将来大きな目標を持つようになるための「土台」を作ることをはじめに考えています。そのためにも、子どもが楽しく真剣にサッカーできるように工夫して、失敗してもいいからチャレンジするのが大事というの、つねに言い続けています。それと、基本というのは毎日の練習で身につくものなので、練習を一所懸命やるというところは厳しく言いますね。ヘタでもいいけど、手を抜いていたら怒る。試合でも、練習で頑張っている子を出そうとしています。」

そのため、技術面でも基本を徹底指導していると金刺次コーチは言う。「とにかく個人の基礎を徹底して鍛えるために「止める・運ぶ・蹴る」という部分には力を入れています。ドリブルなども、取られていいから恐れずにどんどん仕掛ける。人数は多くないし、強くないですが、だからこそ自分自身で何とかしなければいけない



し、指導者の目も届きやすい。ここから伸びるという部分もあると思います」
よけいなプレッシャーを受けることなくサッカーを楽しむ、伸び伸びとチャレンジしながら基礎を身につけていく。そんな環境が整っていることは、子どもたちのプレーを観ているのも実感できた。

「子どもたちが夢を持つんです」

もうひとつ、子どもたちの夢を育む環境が整っていることも、麻機少年団が誇れる



上 清水商高出身の加藤常治監督は、子どもたちにサッカー選手としての土台を身につけさせることに力を注ぐ。右 夢自分の子どもが麻機少年団に入ったことをきっかけに指導者になった金刺次コーチ。チームに活気を与えたいと考え、取材機会に感謝していた。

部分だ。毎年元日には「初練り」が行なわれ、そこには前述の杉山、狩野、眞田といったJリーガーをはじめ、各方面で活躍するOB、OGたちが集い、子どもたちと一緒にサッカーを楽しんでいる。「麻機で育ったプロ選手が来てくれると、子どもたちが夢を持つんですよ。僕らもあんなりたいよ。リキ(杉山)がエスバルスに来てくれたときは、子どもたちも本当に大喜びでしたし、いつも応援しています。そういう先輩がいるのはすごく大きなことで、彼らに憧れた子どもたちの中からまたプロ選手が



出て、その子がまた来てくれれば、夢がつながっていくですよ。(金刺コーチ)
Jリーガーたちは毎年自分が使っていた用具を持ち寄り、子どもたちにプレゼントしている。右で紹介しているGKの増田怜河くんも、杉山にGKグローブをもらい、一番の宝物にしている。そして「杉山選手みたいになって、どんなシュートでも止めたい」と夢を膨らませている。

憧れの対象である杉山自身も、自分が育った少年団への愛着はとても深い。「毎年元日に行くんですけど、あいさつとかトイレのスリッパを並べることとか、そういう厳しさは僕の頃と全然変わってないんですよ。みんなすごく礼儀正しいし、元気が

し、行くとも僕も元気をもらえるので、毎年楽しみにしています。麻機はチームカラーがエスバルスと同じオレンジだし、今後もエスバルスに入るような選手が出てきてほしいので、監督やコーチの言うことをよく聞いて、練習に励んでほしいと思います」(杉山力裕)

そんな想いがつながっていることは、何にも代えがたい財産だ。「夢を見るのは子どもであって、僕ら指導者は夢を見るのではなく、たしかに土台を作ってあげなければいけない」(加藤監督)と言う指導者の下、子どもたちは今日も楽しく一所懸命にボールを追い回している。



オレンジのユニフォームも伝統のひとつになっている麻機少年団。「練習は厳しく、試合は楽しく」(加藤監督)の精神で、試合では子どもたちのチャレンジする姿勢を大事にしている。取材日は東阿部団員が出場し、6年生主体の狭東・城北少年団(緑のユニフォーム)との対戦が行なわれた。審判には「毎日試合に行っている。最後まであきらめず全力でやっついたらみんな褒められた。うちは11人中で6年生が4人だったので、結果、守ってあげられなかった。正味やむを得ない。うちらにもチャンスがありました。子どもたちに自然と情熱が湧いてくる。楽しい中にも必死にやっていた」と金刺コーチはうれしそうに語る。

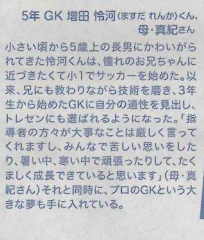
麻機 サッカースポーツ 少年団 に来ていた 保護者の声を 聞いてみました! 2016.02.07



6年 MF 小林 亮輝(にほゆし あきつ)くん、母・さゆりさん、弟・2年 宝隆(ともき)くん
友達に誘われて小1で麻機少年団に入り、サッカーを始めた亮輝くん。6年生になってスタメンが多くなり、大事な役割も与えられて、一段とサッカーが楽しくなってきた。取材当日の大会でも、ボランチとしての献身的な働きを評価され、監督たちからチーム内 MVP に選ばれた。「6年間頑張ってきて、仲間との絆も深くなったし、心も強くなったし、粘り強くなったと思います」と母・さゆりさんも、息子の成長を顔ほころばせる。弟の宝隆くんも、兄の背中を見てサッカーに夢中だ。



5年 MF 藤原 ら(とうがら)さん、母・由紀子さん
ららさんはチームで唯一の女子選手だが、男子の負けられないスピードと突破力でサイド攻撃の軸として活躍中。女子の県トレセンにも選ばれて、将来は「なでしこジャパン」に入ることを見込んで頑張っている。元々真面目な性格もあって自主練習にもコツコツと集中して取り組むことができ、自分自身の成長達成を実感してきた。「コツコツと頑張っていれば結果が出る」ということをサッカーで学べたので、勉強とか他の面でも生かせると思います。母・由紀子さんはうれしそうに語る。



5年 GK 増田 怜河(ますだ れんか)くん、母・真紀さん
小さい頃から5歳上の長男にかわいがられてきた怜河くんは、憧れのお兄ちゃんに近づきたくて小1でサッカーを始めた。以来、兄にも教わりながら技術を磨き、3年生から始めたGKに自分の進路を見出し、トレセンにも選ばれるようになった。「指導者の方々が大変なことでは無いと思って、暑いや、寒い中で頑張ったりして、たくましく成長できていると思います」(母・真紀さん) それと同時に、プロのGKという大きな夢も手に入れている。